

## 短編映画 Rendezvous (ランデブー) 解説

編：芦田

フランスの巨匠クロード・ルルーシュが監督した「男と女」を知っていますか。当時、この映画の作風がきわだって新しかったこと、映像で心理描写を美しく描いたことなどからアカデミー外国映画賞、カンヌ映画祭のグランプリに輝きました。それだけのことなら似たような映画は沢山あるでしょう。

問題はこのクロード・ルルーシュという映画監督がそうとうな車好きだということと、自分の思い付きに、かなりのリスクも覚悟でしてしまうタイプの人らしいということです。このクロード・ルルーシュの作った車に関する二本の映画があります。1本目の「男と女」は1966年に封切られ、2本目の「ランデブー」は1965年に作られています。二つの映画にはいくつかの相互に連想できるポイントが見えかくれしています。映画の内容は、まったく違うものの、あるポイントは「男と女」のイメージ予告版ともとれるからです。そういった意味で見較べるとなるほどねと、フランス人のウイットとしたたかさが読みとれます。

この「ランデブー」はクロード・ルルーシュが身銭を切って個人的に作ったものだと思われまふ。なんとたった9分間のドキュメンタリーです。ストーリーもナレーションもBGMもありません。アメリカの自動車雑誌カーアンドドライバーが「自動車の映画の中で、いままで見たこともない最高のものの一つ」と評しています。

たった9分間のこの映画は、どんなコンピュータグラフィックで作られたものをもはるかに凌いでいます。やらせではなくて現実の映像なんだということを説明しなくても誰でもわかるからです。36年前といえば、全てがアナログの時代だったのです。この二本の映画を作ったクロード・ルルーシュの自分の車フェラーリ275GTBのフロントノーズに撮影カメラを取り付け、早朝のパリ、凱旋門を正面に見える場所から、アクセル全開でスタートします。それだけを聞けば、なんだと思うでしょう。しかし、見ればどんな人も言葉を失います。このフェラーリはアクセルをゆるめません。赤信号であろうが、通行人が横切ろうが、前方をバスや車がふさごうが、この9分間一度も止まりません。いくら早朝で、今の日本に較べれば車が少ないとはいえ、パリのメインストリートで撮影のための交通規制なしに、フェラーリをアクセル全開で走り続けるということは計画してもできないことでしょう。アクセルを踏みつづけていることは響きわたるV12サウンドとカメラが物語っていますし、一応計画されたコースを走るつもりだったのでしようが、その場の状況でアドリブでコースを変えているのが伝わってきます。何度見ても早すぎて信号無視の回数が数えられません。一発勝負の映画をよくやったものだという感想もさることながら、誰もが見てる時に右足に力が入り両手は汗ばみ、見終わると足がガクガクして暫らくは言葉が出ません。監督のクロード・ルルーシュは紛れもなく鬼才+奇才です。

このフェラーリを運転したのはモーリス・トランティニアン。1955年モナコGPでフェラーリで優勝のトップランクのF1ドライバー。だからこそ無謀なことができたのでしよう。

名作「男と女」でレーシングドライバー役をやっている主役のジャン・ルイ・トランティニアンが、「ランデブー」のハンドルを握ったモーリス・トランティニアンの甥だと言うのが、友人に聞いて最近分かりました。